

インドで起業 「早く来ないと バリュー減る」

「混沌」からの転換がビジネス面で加速

世界有数の経済大国・インドで起業する日本人が増えている。ビジネス面では「混沌」のイメージが変わりつつあるという。激しい競争の中で成功する秘訣は粘り強さとニッチな分野への挑戦だ。



業したけれど、コロナによって断念せざるを得ない人たちがいた。けれど、日本に戻って法人を作るなどして足場を固め、インドに再復帰しつつある」と現状を説明する。

世界5位の経済大国

インドは、中国などとともに新興5カ国(BRICS)の一つで、国内総生産(GDP)は世界5位の経済大国だ。人口は13億9341万人(21年)で、国連が7月に公表した「世界人口推計」によると、早ければ来年にも中国を抜いて世界最多になるとされている。「今まさに世界で一番活気があ

り値打ちが上がる」(佐藤教授)不衛生で危険、多宗教で多言語、格差と差別のある混沌とした不思議な国。そんなイメージの転換が、ビジネスの面では日々加速している。

インド・ビジネス・センター(東京都千代田区)の島田卓社長(74)は、こう話す。

「インドでは、重要な契約書類を作成した翌日にはCEO(最高経営責任者)のサインが入って戻ってくるなど、その迅速対応

「駐妻」として渡印後にビジネスビザを取得し、起業した見上すぐりさん(左から2人目)。2021年9月、新アプリ開発のためにタミルナド州を訪れ、エンタープライズである地域の母親たちにインタビューした

「めっちゃくちゃ快適じゃないか」大阪府出身の柴田洋佐さん(43)は2012年6月、初めてインドを訪れた時、そう思ったという。08年に人材採用コンサルタント会社から独立した後、11年に参画した会社でインド人向けのキャリアセミナーをする機会があった。

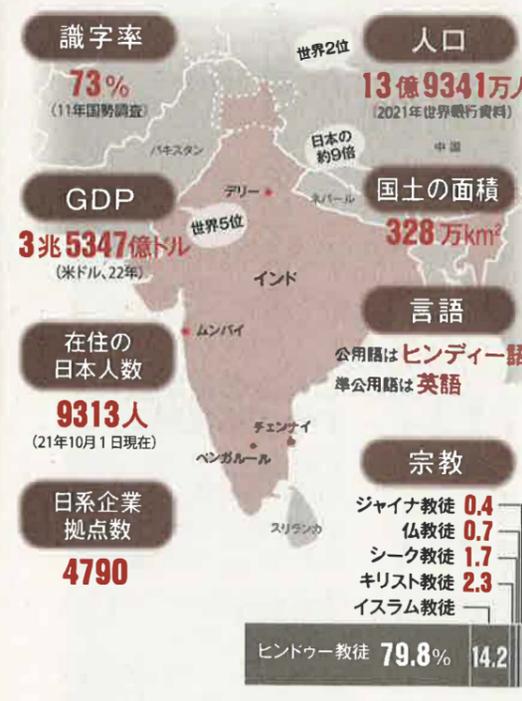
「相当な忍耐力が必要」

とはいえ、インドで起業することはそう簡単なことではない。兵庫県立大学の福味敦教授(インド経済論)はこう話す。「マーケットの規模を考えると行かない手はないでしょう。ただ、大半は失敗するし、これまで進出した日本企業も10年かけて、ようやく実り始める」と聞く。相当な忍耐力が必要です」

「毎日、怒鳴ってました(笑)。けれど、インド人スタッフはなぜ僕が毎回同じレベルの高いクオリティを求めるのかが、そもそも理解できない。読めたらいいじゃん、と。この価値観の違いに気づくのに少し時間がかかりました」(柴田さん)

増える日本人在住者

順風満帆とは言えない日々だったが、シバンスの部数は伸び続け、ベンガロールで月3千部に。次いでチェンナイ、デリー、ムンバイでも発行を開始。デリーでは最も多い時で月5千部を



「駐妻」が現地地起業 駐妻が起業した前例がほぼないため、ガイドはない。渡印後の職歴も空白。大使館の警戒心は強く、ビジネスビザはなかなか発行されなかったという。

「駐妻」が現地地起業

現在、日本の大手人材会社やEVメーカーなどからホームベジや動画などのコンテンツ制作の依頼を請け負っている。大手の広告会社を使わず、より手軽にインドの情報を発信したいという企業の需要にうまく応えられているという。見上さんはこう話す。「急成長するインドを体感できるのは、あと3年くらいだと思います。早く来ないとバリューがなくなっちゃうよ」

「このままでは日本は置いていかれる」7年からインドで宅配寿司ビジネスを展開する「L.A. D.I.T.T.A」の小里博栄社長(51)は、「インドほど仕事がしやすい場所はない」と力説する。特に気に入っている点はヨーロッパ、アジア、アフリカに近いことだ。時差は日本と3時間半、英国とは5時間半。各地へすぐに移動できることもビジネスをする上で重要なポイントだという。

ツフとの意思疎通に苦労したり、州ごとに制度が違うことも多く、その制度も朝令暮改。しかも、競争相手は地元企業だけではない。神戸大学の佐藤教授は、「韓国、中国、そして欧米の資本が続々と参入している。競争は非常に激しい」と指摘する。そんな中で起業を成功させるポイントは粘り強さとともに「ニッチ」な分野に目を向けることだろう。

転機は、アパートの隣の部屋に住む一家との出会いだ。 「ナニー(子どもの世話をする人)を雇って子育てをうまく回しながら、インドでは外国人であるロシア人の妻が大黒柱としてバリバリ働いていた。私も正面切って自分という存在を出すところが欲しかった」



宅配寿司ビジネスを成功させた小里博栄さん。現在はインドに醤油も広める仕事もこなす

photo 小里博栄さん提供

photo 見上すぐりさん提供(上) 柴田洋佐さん提供(下)